

に加え、左右肺のカウント比を求めて定量化した。これらの結果、BALF 総細胞数、リンパ球・好中球実数、BALF 中 Total Protein 濃度、 ^{67}Ga シンチグラムの障害肺への集積はともに照射後 60 日目をピークに増加しており、一定の傾向がみられ肺臓器の活動性を反映しているものと思われた。なお、BALF 中 Phospholipid は照射後ごく早期に上昇が認められた。

21. 悪性腫瘍治療中の ^{67}Ga び慢性肺集積

—— 予後因子としての意義 ——

石田 淳	杉村 和朗	三原裕美子
起塚 裕美	古川 珠見	内田 伸恵
杉原 正樹	児玉 光児	安井 清
笠井 俊文	田中 寛	石田 哲哉

(島根医大・放)

悪性腫瘍治療中のガリウムび慢性肺集積の予後因子としての意義、至適検査時期について検討した。ガリウム集積前後の血中酸素分圧は、予後不良群 6 例全例で低下したが、予後良好群 2 例では低下を認めなかった。CRP は予後不良群で 4 例に上昇、予後良好群では上昇しなかった。pneumonitis 発見を目的にガリウムシンチを施行する場合、CRP 等の炎症反応より、血中酸素分圧の持続的低下を目安に施行すべきである。ガリウム集積例のうち血中酸素分圧持続低下を認める例では、炎症細胞浸潤、間質浮腫による A-C block が進行していることを反映しており、予後不良になる可能性が高い。

22. ^{67}Ga -citrate のびまん性肺集積の検討

—— 薬剤性肺炎の予後を中心に ——

原田 雅史	徳山 教民	向所 敏文
斉藤 博史	須井 修	上野 淳二
吉田 秀策		(徳島大・放)

昭和 59 年 4 月より 63 年 3 月までに施行された Ga シンチのうち、肺野にびまん性集積を認めた 56 例について検討した。41 例は炎症性疾患、12 例は腫瘍性疾患、3 例は原因不明であった。炎症性疾患のうち、臨床的に薬剤性肺炎と考えられる症例が 21 例と最も多かった。薬剤性肺炎の原因としては、悪性リンパ腫等に用いられる cyclophosphamide が最も多かったが、薬剤の使用量と発生頻度との間には、比例関係はなかった。Ga シン

チにて集積を認めた症例のうち、呼吸器症状を呈した者は 7 例 (33%) であり、残り 14 例 (67%) は無症状であった。症状を呈した者のうち、死亡は 1 例であった。

23. ^{67}Ga -citrate の集積を認めた胸腔内原発の hemangiopericytoma の 1 例

合田 文則	余田みどり	坂本 和裕
宮本 勉	瀬尾 裕之	川崎 幸子
大川 元臣	田辺 正忠	(香川医大・放)
山本 眞也		(同・一外)
小林 省二		(同・一病理)

胸腔内原発の非常に発育の速い hemangiopericytoma の 1 例を経験した。症例は 27 歳男性で、既往歴に自然気胸があり、急激に呼吸困難をきたした。 ^{67}Ga シンチグラフィーにて、広範囲にある腫瘍の一部にのみ ^{67}Ga の集積を認め、全く認めない部位もあった。 ^{67}Ga の集積の程度を病理組織像と比較検討した。 ^{67}Ga の集積は腫瘍が出血、壊死に陥った部位に認め、充実性で血管構造が比較的保たれた部位には認められなかった。すなわち、 ^{68}Ga は腫瘍細胞そのものへ集積しているのではなく、それに随伴した変化に集積しているものと推定した。

24. Non-malignant stomach への ^{67}Ga 集積の 2 例

山本 博道		(岡山労災病院・放)
平木 祥夫	竹田 芳弘	藤島 護
西原 忍	赤木 史郎	松原伸一郎
青野 要		(岡山大・放)

ガリウムシンチグラフィ (Ga シンチ) にて胃集積がみられた場合、悪性リンパ腫や胃癌を合併していることが多いとされてきた。

今回われわれは、未治療の肺癌および悪性リンパ腫で Ga シンチ上胃集積が疑われ、発泡剤を用い胃壁への集積がほぼ確認できた Non-malignant stomach (胃に悪性腫瘍のみられない状態) の 2 症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。胃集積の原因については、化学療法も施行しておらず、担癌状態がひきおこした何らかの Ga の体内分布の変化がその原因と示唆された。